

## 大きな木

並木せつ子

我が家には大きなシュロの木がある。毎春、花が咲き終わると種が大量にこぼれ落ちるので、近所迷惑になる前に花と葉を刈らねばならない。シュロはひたすら上に伸びるしかない木で、今では2階の屋根に届くほどの高さになってしまった。長い柄のついた木鋏を使わないと届かない。この木鋏は結構扱いが難しく重労働なのだ。父が植えた時は私の背丈よりも低かったが、何十年か後、娘がシュロを相手に苦戦するようになるとは思ってもなかったらう。

シュロに限らず地植えの木は大きくなる。ヒトが老いるのなんかお構いなさだ。植えた時はヒトも若かったから、やがて手入れが大変な年齢になることにまで考えが及ばない。見上げるような大木でなくても、自分の背丈と同じになったら、もう既に剪定作業は大変なのだ。『ティッチ』が植えた木や、『ぼくのものき』は、大丈夫かと心配になるくらいである。それでも伐採する気になれないのは、木に神聖なものを感じるからだ。木を伐るときに必ず塩をまく習慣のあった母の影響かもしれない。亡くなった人が“お空の星になる”という話よりも、私には『おばあちゃんは木になった』の方が得心がいく。

『おばえていろよおおきな木』は、大きな木の陰にある家に住むおじさんが、木を煩わしく思って伐ってしまう話だ。木がなくなって数々の恩恵に気づき、毎日泣いていたおじさんだが、切り株に小さなひこばえを見つけ育て始める。『ぼくたちのいちょうの木』は、幼稚園の庭にあった大イチョウが伐られることになり、しんやたち園児は反対するが、落ち

葉が道や近所の屋根につもって迷惑をかけるからと説得される。切り株だけになった大イチョウを見て、しんやも新しいイチョウの芽を育てようと決心する。

大きな木が年数を経て切り株になる話は、他にも、『いっぼんの木のそばで』のオークの木は、長く長くヒトと共に生きてきたが、雷に打たれて切り株だけになる。しかし近くの地面には新しいオークの芽が……。『その木』は、ゆいと仲良しだった木の話。引越して木と離れ離れになっていたゆいが、数年後に戻ってくると、木は切り株になっていた。そして、ここにもひこばえが……。どれも、新しい芽が希望をつないでいる。

再開発や道路の拡張などで樹齢〇〇年という木が、地元住民などの反対にも関わらず伐採されたというのはよく聞く話である。都市で大きな木が生き延びていくのは難しい。おそらく切り株さえ残らないことのほうが多いだろう。それほどの大木でなくても、毎年、春の訪れを知らせてくれた白木蓮や、通勤途上に花びらを散らしてくれた桜も、家の建て替えなどでいとも簡単になくなった。大きな木があっても迷惑にならないような農山村には人が住まなくなり、人が住む所では大きな木が邪魔者扱いされる。皮肉なものだ。

小学1年の秋に「イチョウの葉っぱを100枚拾って、明日持ってくる」という宿題が出た。100枚のイチョウの葉を調達するのは容易なことではないが、近所で集めることができたのは幸いだった。私の宿題は無事完了したが、大イチョウを失ったしんやだったら、この宿題はとても達成できなかったらう。(100枚のイチョウの葉を何に使ったのか全く覚えていない)。私自身も木の恩恵にあずかったり、煩わされたりだったが、それでも大きな木を仰ぎ見ると、やっぱり『木はいいなあ』、『おおきな木がほしい』なあ、と思うのである。

(なみき せつこ)

## 『キプリング童話集 動物と世界のはじまりの物語』 翻訳の旅

小宮 由

この春『ジャングル・ブック』や『少年キム』などで有名なイギリスの作家、ラドヤード・キプリングの『キプリング童話集 動物と世界のはじまりの物語』が拙訳により、アノニマ・スタジオから出版された。この本は、いまからおよそ120年まえに書かれた作品で、過去にも他の訳者によって邦訳されているが、スイスの絵本作家、ハンス・フィッシャーによる挿絵で出版されるのは初となる。

翻訳することになったきっかけは、昨年、同じくアノニマ・スタジオから出版した、トルストイの『イワンの馬鹿』だった。この本の挿絵もハンス・フィッシャーが手がけていて、これらの原書を手に入れたのと同時期に、私から編集者に提案したのだった。

ここでは、本書の魅力を伝えるため、キプリングやフィッシャーついてと、本作にまつわるエピソードをいくつか紹介させてもらいたい。

### キプリングについて

ラドヤード・キプリングは、1865年、当時、イギリスの統治下であったインド・ボンベイに生まれた。キプリングは、1907年、英語圏初、且つ史上最年少（42歳）で、ノーベル文学賞を受賞するのだが、晩年は国王ジョージ五世と親交を持ち、文学界のみならず、政界にも影響を与えた。特筆すべきことの多い波乱万丈の70年間の人生であったが、その中でも、本書に密接する事柄として、キプリングの「旅」について触れたい。

キプリングは、少年期から青年期にかけて、多くの国を旅した。最初は、5歳でボンベイを離れ、イギリス・ポーツマスで教育を受け、

その後、パキスタンのラホールで新聞社の編集助手となった。そこで貯めたお金で、インド、シンガポール、香港、日本、カナダ、アメリカなどを旅して、イギリスに戻った。そして、ロンドンで作家として名を上げると、南アフリカ、オーストラリア、ニュージーランド、インドを旅し、アメリカ人のキャロラインと結婚すると、新婚旅行でアメリカと再び日本を訪れ、その後、キャロラインの生家があるバーモント州ブラトルボロに家を構えた。

次女が生まれた時期に、イギリスのデボンへ引っ越し、長男が生まれてからは、約10年間、冬休みを南アフリカで過ごした。37歳の時、イギリスのイースト・サセックスにある1600年代に建てられた古い屋敷を買って、そこを終の住処とした。

上記のキプリングの旅（移住を含めて）は、大まかなものであるが、これだけでも相当な距離だ。当時の旅の手段は、海路と陸路だけで、まだ航路がなかった。その中でこれだけの距離を旅したとなると、その移動時間を考えただけでも相当なものになる。しかし、この旅があったからこそ、本作が誕生したのだ。

### 『キプリング童話集』について

本書には、全11話の短編があり、各話は、いろいろな国や地域が舞台になっている。

例えば、第2話のクジラの物語の舞台は、北大西洋の海のお話で、出てくる水夫は、アイルランド人だ。第3話のサイの物語の舞台は、紅海にうかぶ無人島で、出てくる人物はインド人。第4話のヒョウの物語の舞台は、エチオピアで、アフリカに住む動物の名前がたくさん出てくる。第5話のゾウの物語の舞台は、南アフリ

カで、主人公のソウのぼうやは、隣国のボツワナまで旅をする。第6話のカンガルーの物語は、オーストラリア。カンガルーは、オーストラリア全土を縦横無尽にかけまわる。第7話のアルマジロの物語の舞台はアマゾン川。第9話のカニの物語は、マレー諸島だ。

キプリングが旅した国を頭に入れてから本書を読むと、そのお話のほとんどが、キプリングが実際に旅をした土地だと気づく。キプリングは、実際にその土地を自らの足で踏み、見聞したことをお話にしていたのだ。

ここで、ふと思ったことがある。さきに、旅の手段は、海路と陸路だけだったと書いたが、そうであったが故に、キプリングは、これらのお話が書けたのではなかろうか。飛行機でひとつ飛び、ではなく、蒸気船や列車に揺られながら、ゆっくりと旅をしたからこそ、さまざまなことを感じとることができただろうし、創作する時間もあったのだろう。私は、本書を翻訳しながら、各話のスケールの大きさや、ゆったりとした時間の流れを感じ、そう思った。

### 『キプリング童話集』の誕生秘話

本書は、1902年、キプリングが37歳の時に発表された作品で、キプリングには、3人の子どもがいた。長女ジョセフィンと、次女エルシー、長男ジョンだ。そして、この本のお話は、キプリングが、おやすみまえのわが子のために語って聞かせたものだった。

原題である『Just So Stories』の「Just So」とは、毎晩、同じ話を、一字一句いい変えることなく「Just So（その通り）」に語らないと、ちがった箇所を子どもに指摘された、ということから、その題名になっている。

最初の3話は、キプリングが、長女ジョセ

フィンのために語っていたお話で、親子の間の「眠るまえの魔法のおまじない」となっていたらしい。

だが、この本が出版されるまえ、ジョセフィンは、家族でニューヨークを訪れた際、肺炎にかかり、この本を見ることなく、亡くなってしまった。故に、この本には、ジョセフィンへの鎮魂の願いも込められている。キプリングは、その当時では珍しかったであろう、子育てに積極的な父親だった。

### フィッシャーについて

この本に挿絵をつけたハンス・フィッシャーは『たんじょうび』や『こねこのぴっち』などで有名な絵本作家だ。1909年、スイスのベルンに生まれ、絵本の他にも、動物園や小学校などに壁画を描いたり、チューリッヒ

州の国語の教科書に挿絵をつけたりと、生涯、子どもたちへの仕事に注力した。本書に挿絵をつけたのは、第二次世界大戦後の1946年だったことも、フィッシャーの子どもに対する気持ちが伝わってくる。きっと、戦争という闇をぬけ、未来の象徴である子どもたちへ、明るい希望を託したかったのではなかろうか。本書の生き活きとした線画は、動物画を得意としたフィッシャーの真骨頂のように思える。

最後に、この本の装丁は、デザイナーの櫻井久氏によるもので、「背継」と呼ばれる、2種類の異なる素材を継ぎ合わせて仕立てられた、高級感のある表紙にも注目してほしい。そこには電子書籍では味わえない感覚があるはず。120年という古さを感じさせない、瑞々しいお話の数々を、身近な子どもと楽しんでもらえたら、訳者として本望である。

(こみや ゆう：翻訳家)



『キプリング童話集 動物と世界のはじまりの物語』文・ラドヤード・キプリング/絵・ハンス・フィッシャー/訳・小宮 由/224ページ/本体1800円/アノニマ・スタジオ/2021年5月刊